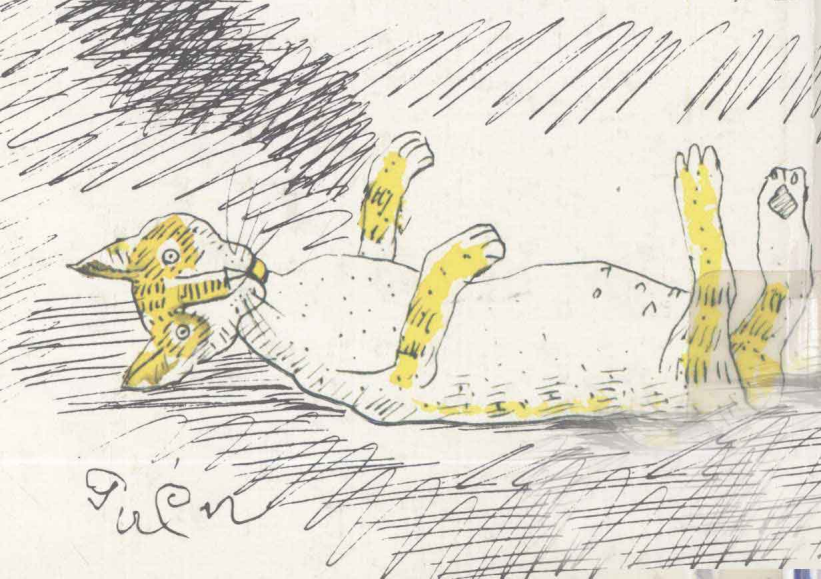
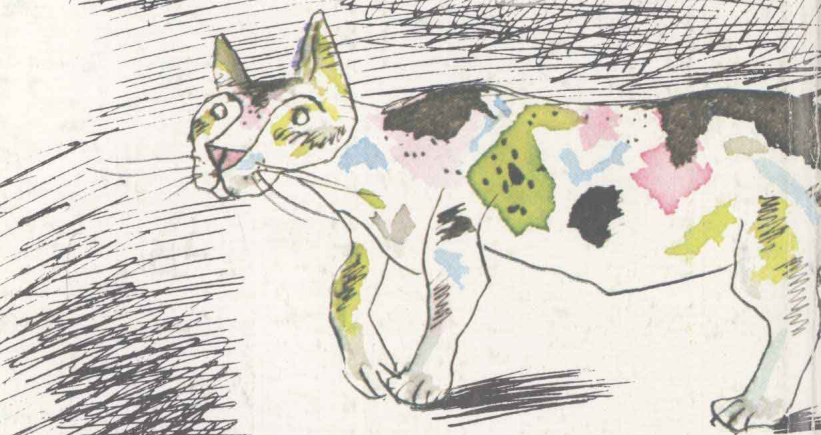


猫のいる日々

大佛次郎



猫のいる日々

大佛次郎
六興出版

猫のいる日々

昭和53年9月25日 初版発行
昭和58年5月30日 四刷発行

著者 大佛次郎

発行者 賀来壽一

発行所 株式会社 六興出版

東京都文京区水道二一九―二

郵便番号 一一二

電話 03(943)3431

振替 東京 192448

印刷 図書印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

© 1981 Masako Nojiri

落丁・乱丁の本はお取り替え致します

0093-07023-9216

猫の
いる
日々・目次

■隨筆

猫のこと	7	お通夜の猫	51
黙っている猫	10	舞台の猫	55
私の猫	13	歳のない人	58
熱海の猫	17	猫騒動	61
猫々痴談	22	小鳥の客	65
バイコフ氏の猫	29	山寺の猫	70
「隅の隠居」の話	37	猫の風呂番	74
猫の引越し	41	早春一夜	78
無能なる家族	44	牢獄の猫	83
泰山鳴動	48	千坂兵部の猫	87
		化猫について	91

白ねこ	95
猫家一族	99
ある白書	104
猫の出戻り	108
八百屋の猫	112
ここに人あり	116
困ったこと	120
ビルマの竹	124
納戸の猫	128
十五代將軍の猫	132
そぞろ歩き	136

再説「猫の湯屋」	142
わが小説	146
■小説・童話	
白猫	151
猫の旅	211
小猫が見たこと	223
白猫白吉	233
スイツチヨねこ	247
■写真撮影	
原勝義	

装帧・猪熊弦一郎

随筆・猫のいる日々



次郎

猫のこと

何の本で見たのか忘れたが、――

無論、人間の心がおだやかだった昔のことだし、よく醸した酒のようにとろりとした春の昼間のことだったのに違いなように思われる。田舎のお寺の和尚さまが、飼猫が棚の上で居眠りしているのに気がついた。

実際に、この猫と云う奴、元来子猫でも睡^{ねむ}そうな顔をしているものだが、この猫は、もうかなり古くこのお寺にいるお爺さん猫で、春の日を懈^{ものう}げに、こくりこくりと見るからに氣持よさそうに舟を漕いでいたのである。

狭い棚の端の方だったのである。和尚さまが見まもっている内に、大きく舟を漕いだと思うと、年をとって耄^ぼけていた加減か、足を踏み外した。綿の包のようにむっくり肥った奴である。が、そこは体のしなやかな猫だから、床に落ちた時は、四本の肢の上に軽く立っていて腰を

打つこともなかったのだが、その途端に目が醒めたらしく、ふと呟いたことには――

「ほいと、しまった！」

はつきりした人間の言葉である。

そう云つて了^{しま}ってから、猫は和尚さまが聞いていたのに気がついたのである。

「馬鹿！」

と和尚さまは、微笑った。

猫はそれから行き方知らずになったと云う。青い蔭の濃くなった藪があり山吹の花が黄ろく咲いている裏山へ入って行って、それきりだと云うのである。

僕の好きな話である。

同じ話が、芝の増上寺の猫が梁から落ちて思わず人間の言葉で、南無阿弥陀仏と誦えたと云うのに形を歪めて伝わっている。これでは赤く塗った寺のように俗っぽい。

○

アンドリウ・ラングの言葉である。「よく可愛がられていたらしい肥った美しい猫が、どこから来たとなく家の中へ入って来て、帰ろうともしないで落着いて了うようなことが、誰れの

経験にもよくある。この失踪を深く悲しんでいる飼主を捨てるのである。帰ろうとすればわけなく帰れるものを、帰らないのである」

煉金の道士の陰気な道服の裾にも従えば、マクベスの妖姿の窟にも燐のように青い瞳を点じ、お伽話の世界の明るい芝生の上をも白い影を印して横切って通る。

静かな美を持つミスチックである。

○

私は自分の家に持っていたい

わけの分った一人の妻と

書物の間を歩きまわる一匹の猫と

それなしにはどの季節にも

生きて行けぬほど大切な

私の友人たちと

（堀口大學氏訳アポリネエル）

（昭和六年七月号・新青年）

黙っている猫

猫は、ものごころのつく頃から僕の傍にいた。これから先もそうだろう。僕が死ぬ時も、この可憐な動物は僕の傍に在るに違いない。——お医者さんが来る。家族や親類の者が集る。（最後には坊さんも来るわけだが）その時此奴は、どうも、いつも見なれない人間が出入りして家の中がうるさくて迷惑だと云うように、どこか静かな隅か、日当りのよい所に避け、毛をふかふかと、まるくなつて一日寝ているだろう。寝るのに倦きたら、起きて思ひの丈伸びをする、草原へ出て虫を追う。空腹を感じたら、降りて台所へ行つて、長い尻尾を立て、家人の裾に体をすり寄せて飯の催促をする。それが済んだら顔を洗う。さて、それから何をしたら一番氣持がよく満足かを考へて其の通りにする。空氣を薄ら寒く感じたら、藁の匂いを嫌ひながら、活氣があつて暖い看護婦の膝へあがつて、また睡ることだけを考へる。

その時に手伝ひに来て在る者の誰かが、「この猫はあんなに可愛がつて貰つたのに、すこし

は氷をかく手伝いでもおしよ」と、この永年の主人の死に冷淡なエゴイストを非難するのだ。悪くすると、猫は蹴飛ばされる。——僕同様に猫を愛することを知っている妻は、そんなことを云う筈がないし、する筈がない。また僕は、もう口が利けなくなっているわけだが、これを聞いて、つまらない無理なことを云う人間だと、ひそかに腹を立てていることだろう。それは僕には、目が見えなくなっている、卓の蔭に白いバッタのように蹲ったり、散らばった本の中を埃をいって神経的に歩いている此の気どり屋の動物の静かな姿や美しい動作を思い浮べていることが、どんなに心に楽しくて、臨終の不幸な魂を安めることかわからないからだ。

——来世というものがあるかどうか、僕未だにこれを知らない。仮りにもそれがあるならば、そこにも此の地球のように猫がいてくれなくては困ると思うのである。いないとわかったら、僕の遺言のうち一番重要なくだりは、厳密に自分の著作を排斥して、好むところの本と猫とを、僕の棺に入れるように要求するに違いない。

猫は僕の趣味ではない。いつの間にか生活になくしてはならない優しい伴侶になっているのだ。猫は冷淡で薄情だとされる。そう云われるのは、猫の性質が正直すぎるからなのだ。猫は決して自分の心に染まぬことをしない。そのために孤独になりながら強く自分を守っている。用がなければ媚びもせず、我儘に黙り込んでいる。それでいて、これだけ感覚的に美しくなる動物

はいない。冷淡になればなるだけ美しいのである。贅沢で我儘で他人につめたくすることは、どんな人間の女のヴァンパイアより遙かに上だろう。だから猫を可愛がるのには、そういう女に溺れているような心持になることで、それでいて決してこちらの心を乱さずにいられるのだから有難い。読書に疲れたら顔をあげて、この「客間の虎」の、もの静かで、おごりに満ちた優しい姿態を眺めればいいのである。こちらからも執こくしないで、そっと放任して置いてやれば、猫はいよいよ猫らしく美しくなって、無言の愛着を飼主に寄せて来るのである。多少なり、こうした沈黙の美しさが感じられるひとならば、猫を愛さぬわけはないと思うのである。

〈昭和五年十月・キング〉

私の猫

ベルシャ猫。イギリス猫。シャム猫。こうした素晴らしい猫が僕の周囲にいて思っている人がいる。いや、全く自分でもいたらい、欲しいなと常に心に描いている。少し馬鹿でもよろしい。あの豪華な装いをし、スカートを曳いて歩いているが如きベルシャ猫を想うとき、何か心にときめくものがある。シルバアフオクスに似た毛皮をビッタリ膚につけ聡明な眸と意気な歩き振りのイギリス猫。剽悍なシャム猫。それぞれが皆、日本の猫より美しい事は、較べる方が間違っているかも知れない。

是は負惜みといわれるかも知れない。併し今私の身边にいる二匹——匹といい度く無い程に彼等は私の家族の一員だ。——の白いニッポンの猫。

コトンとシロ。純白でなんと立派な身体をしている事だ。

日本の猫でも、是を人間同様の生活習慣に入らせ、鼠を取る事にも酷使せず、或る程度の贅

沢、傲慢を許すならば、決して外国の猫後におちるものではない。

コトンとシロは兄妹である。しかも純白なので、どっちがコトンでシロか人間の双児以上に判別がつかない。私や家庭のものにはその態度ですぐ見別られるが他人には分らないらしい。だから出鱈目に呼ぶと非常に冷淡に素通りする。

この二匹は食事の要求以外には、殆ど鳴き声を出さぬ、猫は私の傍らにいる場合も絶対に黙りこくっている。夜半机の隅で此二匹の猫が私を間にしては眠る。

私の妻が病気で入院した。猫を殆ど手離した事のない妻とはいえ、病院まで二匹の猫を連れて行けず、留守をさせた。一日二日と経つ内に、二匹が二匹ともだんだん落着きを失い、気が荒くなつて行っているのを発見した。食事を摂る量も少なくなつて行つた。やたらに松の木に駆け上ったり、ゴルフの球を投げると子猫の如く大袈裟に身体ごと投げ出して押えたりする。それでいてケロリとそれを離して憂鬱に歩いて去ってしまう。本当につまんなさうだ。それが私にもよく分つた。妻が退院して帰ると、すぐ、コトンもシロも瘦せたわと云つた。

私のところへ来る友人の話。

彼の家にも二匹の子を連れた真黒な猫が、裏口からコッソリ入つて来た。連れ子をして来た